

今回は、発願から祖書普及期成会の組織・校訂作業の準備段階までの様子を見てきたが、この事業は近代日蓮思想展開の上で大きな基礎を形成したものとと言える。しかも加藤文雅の他にも、当時武見日恕を中心とする御遺文編集計画があったことは、あまり知られていなかった。この事業は当初わずか一年で完了する予定であったが、実際には足掛け三年の歳月を費やし明治三十七年八月に刊行され、非常に短期間の内に綿密な校訂作業まで行おうとしたため様々な問題が生じたことは十分に予想される。

この精力的に行われた大事業の苦心や意義が忘れられようとしている今日、さらにこれらの背景について今後とも考察を加えて行きたい。

## 上総七里法華地域における 十ヶ村題目講について

岩 田 諦 静

△一▽、ここである十ヶ村とは、日什上人門流の日泰

上人（一四三二—一五〇六）に帰依し、領内に法華宗改宗令を出した土気城主酒井定隆の居城のあった土気に隣接する村々のことである。私が縁有って入寺した、千葉市大木戸町の宝光山善徳寺において平成元年四月十日に十ヶ村題目講が開かれた。この題目講は現在六幅の御曼荼羅本尊を護持し、四月十日、七月十日、十一月十日の年三回の講を開いて、十ヶ村を三年一回の割合で循環している。その内の二幅は宝暦四年と享和三年のもので、あとは新しく明治以後のものであった。元文法難後まもない時期に形成されたと考えられるこの講の性格について二幅の本尊を手がかりとして以下に考えてみようと思う。

△二▽、この講が護持する六幅の本尊とは以下のものである。すなわち、(1)宝暦四年（一七五四）二月日。

妙満寺一〇一世、権僧正日瑞（本光院寿源日瑞）。南無日蓮日什大聖人と勧請。十ヶ村講中一結。(2)享和三年（一八〇三）正月二十八日。妙満寺一五八世日晃（惠照

〔性〕院是妙日晃）。善勝寺二十七世。南無日蓮大菩薩、

南無日什大聖師、日義日仁日運と勧請。上総国市原郡山辺郡、捨箇村構中一結。(3)明治八年五月日。妙満寺権少教正日馨（二百四十九世、幸安院日馨）。十ヶ村萬人構

中。(4)明治十年九月日。妙満寺少教正日桓(二百五十一世、二百五十六世再選、眞浄院日桓)。(5)明治十四年七月十二日。身延山七十四世。日鑑(自厚院誠研日鑑、飯高檀林化主)。上総国市原郡山辺郡十箇村構中。(6)大正四年五月七日。日什末流大僧正日生(妙満寺二百五十九世、聖応院日生、本多日生)。旧十ヶ村萬人講中一結の六幅である。

(1)宝暦四年の本尊は、大綱蓮照寺十八世から本山妙満寺へ晋山した日瑞上人のものである。この本尊は元文法難(元文三年・四年、一七三八―一七三九)から十五年後のものである。(2)享和三年の本尊は、土気善勝寺二十七世(ただし日蓮宗事典は二十八世)から妙満寺へ晋山した日晃上人のものである。元文法難から六十四年後のもので、宝暦四年から四十九年後のものである。この本尊の下端に、ここでいう十ヶ村の名前が明記されている。すなわち、(1)大椎村(現在千葉市大椎町)、(2)板倉村(同板倉町)、(3)小山村(同小山町)、(4)大沢村(茂原市大沢)、(5)金剛地村(市原市金剛地)、(6)奈良村(同奈良)、(7)国吉村(同東国吉)、(8)高倉村(同高倉)、(9)越智村(千葉市越智町)、(10)大木戸村(同大木戸町)である。

蓮照寺・善勝寺は常源院日進(行信、一六九八―一七六七)師の在家中心の内証題目講の信仰者たちを寺方に背くものとして幕府に訴えた側の寺である。そのことは寺方の僧によって認められた本尊を護持している講中の性格を明らかにするものである。また日瑞上人の本尊は、南無日蓮日什大聖人と勧請し、日晃上人のそれは南無日蓮大菩薩、南無日什大聖師、日義日仁日運と勧請している。それに対して、常源院日進師流のそれは日経・日寿・日尚・日暹等を勧請するといわれる。現在、十ヶ村の題目講の人々の伝えるところでは、昭和三十年ごろまでこの講中は村の大きな家で営まれたものであるが、内証で行っていたとは聞いていないという。

△三▽、この講の運営は毎年四月十九日金剛地の本宮寺で営まれる日泰講の役員会で決定される習わしになっている。宝暦・享和の本尊では「十ヶ村講中一結」となっているのに、明治からの「十ヶ村萬人講中〔一結〕」と称されて一般的名称になっている。しかし、現在の十ヶ村題目講が受け継いでいる積善功德帳では「本山講」と自称している。このことは十ヶ村講中は本山妙満寺に直属する講中であるという意味を持つものと考えられてきたことを現わしているように思う。

〔四〕、行信師が三宅島で延享五年に書いた「四十一ヶ条式目」によれば、彼の内証題目講中の信者は、正五九と二季彼岸と御命講（お会式）には本尊を供養すべしと記している。正月・五月・九月の守護符は現在も各檀家へ持って行く。二季彼岸については、昭和四十年前半までは、十ヶ村の講中では春彼岸には大権長興寺から、秋彼岸には金剛地本宮寺から順次に参詣していたという。

〔五〕、以上のことから、この十ヶ村講中は、行信等の内証題目講の人々を幕府の力をかりて弾劾した元文法難の直後に、寺方である蓮照寺・善勝寺等によって新しく構成された、いわゆる「表の題目講」の一つではなかったかと考えられる。それはいまだ安定しない檀信徒を治める役目を持って、寺方の指導のもとに組織された本山講でなかったかと推測を逞しくするものである。

（略注）

## 『毒箭』にみる思想と信仰

小野 文 珧

本文四九七頁、年譜跋等を入れて五三二頁の本書は、昭和二四年九月一七日、B級戦犯として巣鴨戦犯拘留所で絞首刑になった元陸軍中将岡田資氏の遺稿集である。

昭和二九年に岡田資遺稿刊行会によって出版され、昭和三二年に再刊、再刊時に「法華経と現代」という副題が付された。この岡田資氏については、昭和五六年作家の大岡昇平氏が「ながい旅」と題して東京新聞朝刊に、その法廷闘争を中心として小説風に連載し評判をよんだ。しかし、大岡昇平氏は「法華経や日蓮の教義については自分はいくらも、中将の遺稿も難解なので、岡田中将の書いたことではなく、したことを報告する」として岡田資の仏教信仰については紹介するにとどまっている。

岡田資は熱心な法華経信仰者で、青年に法華信仰を説くことを自分の使命にしていた。終戦後、東海軍管区でのB29搭乗員の処刑の責任を問われ、当時司令官であった岡田は横浜の軍事裁判所で裁かれた。岡田はこの裁判